

## 第 20 話 足利氏の内訌

吉野の朝廷の威勢が衰えと、今度は、京都のいわゆる北朝を戴いて  
政治を執っている足利氏の間には内輪喧嘩が起こる。 師直も師泰も直義も殺される。

### 足利直義と高師直兄弟

高師直が吉野を攻めたので、朝廷は賀名生の山中に遷られて、その後朝廷の威勢も暫くは振る  
わなかったが、君臣の間は常に一致して、いつかは回復の志を遂げようとしていた。

ところが、京都の朝廷を戴いてほしいままに天下の政治を執っていた足利氏は、吉野の朝廷の威勢が  
衰え、暫く京都が攻められる心配が無いとなると、忽ち安心して、驕りを極め、内輪の間で互いに勢  
力を争ったりした。 そのうちでも、殊に最もはなはだしかったのは、高師直、師泰の兄弟と將軍尊  
氏の弟直義との争いです。

そもそも足利直義は、尊氏の同母弟でして、尊氏が建武 2 年 11 月、鎌倉に叛いた時から、常にその  
相談相手になって、よく謀り、よく戦い、その功が甚だ大きかった上に、知恵もあれば胆力もあつたの  
で、尊氏は光明院をお立てして幕府を京都に開くと、一切の政治上の事は直義に委せて、高師直にこ  
れを助けさせた。

### 師直兄弟の専横

ところが師直は早くから尊氏の執事となり、弟の師泰と共に一切の軍事上の事を統べて、足利氏の一  
門の人々をまで指揮することになっていたので、中々権力が強く、其の上、度々の合戦に大功を樹て、  
ますます尊氏の信頼を受けていたところに、今度、四条畷に楠木正行を討つて、官軍の勢いを全く衰  
えさせてしまったので、その勢力が非常に盛んになると共に、いよいよ奢りを極めて、わが侘な振舞いが  
多く、直義に対しても傲慢無礼な態度を見せるようなことがしばしばでした。

### 上杉重能と畠山直宗、大休寺の妙吉

その頃、直義の執事をしていた者は、上杉重能、畠山直宗の 2 人だけでしたが、彼らもまた、その  
家柄がよく、軍功も多かったにも拘らず、師直兄弟の下に立たなければならなかったので、久しくこれ  
を怨んでいた。 それが、更にこの頃師直兄弟の傲慢な態度を見ては、いよいよ我慢が出来なくなって、  
これを排斥しようとして企てたが、その実力が遠く師直兄弟に及ばなかったので、正面からは争うことは出  
来ない。

たまたま、直義が篤く信じている大休寺の妙吉という坊さんもまた師直兄弟を好んでいないのを知  
って、この坊さんから窺かに直義に勧めさせて、師直兄弟を除こうとした。

### 足利直冬

けれども、師直兄弟の勢力は既に非常に強く、足利直義の勢力を以ってしても、すぐにはこれを除

くことが出来そうになかったので、直義は先づ自分の勢力を養うために、正平 4 年 4 月、自分の養子の直冬を長門探題に任じ、備中、備後、安芸、周防、長門、出雲、因幡、伯耆の八ヶ国を司らせ、備後の鞆の港に滞在させた。いざという時に兵を率いて東上させて、師直らを討とうとしたのです。この足利直冬は尊氏の庶子（訳注：正妻でない女性に産ませた子）ですが、初め、尊氏が対面を許さなかった時に、直義が養って自分の子としたのです。

こうして正平 4 年 閏 6 月、直義は坊さんの妙吉を窃かに備後に赴かせて、直冬に東上の準備をさせると共に、自分はその 30 日に光明院の御所に参って、密かに師直の不義不忠を申し上げて、7 月の初めに、師直が政治に与ることを停めて、執事をも罷めさせた。

師直は直義の処置を大いに怨み、仕返しをしようと準備を始めた。河内の東條で楠木正儀と戦っていた弟の師泰が、あわてて京都に帰ったのはこの時の事です。

こうして正平 4 年 8 月、高師直、師泰の兄弟は、播磨の赤松則村らに、先づ山陽、山陰の両道を塞がせて、直冬の備後からの東上を出来なくさせた上に、兵を自分の邸に集めて直義を討とうとした。直義もまた兵を集めたが、その数が師泰らの半分にも達しなかったので、遂に直義は逃げて尊氏の邸に入った。

師直ら、尊氏邸を囲む

8 月 15 日、師直らは兵を進めて尊氏の邸を囲み、尊氏に迫って、自分を直義に讒した上杉重能、畠山直宗および坊さんの妙吉を引き渡すように請うた。尊氏はよんどころなく重能、直宗の 2 人を流罪に処すことにして、直義に政治を委せたのを止めて、鎌倉の義詮にこれに代わらせることを約したので、師直は囲みを解いて退いた。その翌日、師直は重能、直宗の 2 人を越前に流し、妙吉をその寺に捕らえさせたが、いなかったで、その寺をさんざんに打壊させて、怨みを報いた。

直義の屈服

間もなく、尊氏は師直との約束に依って、尊氏の少子（訳注：末子）の基氏 -- 時に 10 歳 -- を鎌倉に下して、長子の義詮を京都に招いた。10 月の末に、義詮は京都に着いて、今までの直義のいた邸に入ったので、直義は細川顕氏の邸に移ったが、師直はそれにもなお満足せず、密かに直義を殺そうと謀ったので、直義は遂にその 12 月に髪を剃って坊さんになり、決して世間の事には関係しないという事を示して、師直の心を宥めた。いかに師直兄弟の勢力が盛んであったかが分かるでしょう。先に越前に流された上杉重能、畠山直宗の 2 人もまた、直義が出家したと聞くと、髪を剃って謹慎の意を表したが、執念深い師直の恨みは、それでもなお霽れなかったのか、その年の末に、人を遣わして遂に 2 人を殺させた。

こうして、京都における足利直義と高師直との争いは全く師直の勝利となったが、師直は更にこの機会に乗じて、備後の直冬を滅ぼし、直義党の根を全く絶やそうと企て、その地方の武士らに命じてこれを討たせた。直冬は不意を襲われて一時は危なかったが、辛くも海路を四国に遁れ、それより九州に

## 第 20 話 足利氏の内訌

ひご かわじり  
入って肥後の河尻に着いた。

### ただふゆ 直冬、九州に入る

その頃、九州では、九州探題の一色範氏と大宰府の少貳頼尚との仲が悪く、同じ足利方が二つに分かれて睨み合っていた外に、征西将軍官懐良親王を中心とする菊池氏らの官軍がいた。直冬は九州に入ると、幕府の命令を受けて下って来たのだと称して身方を招き、京都にいる尊氏、直義のために、奸臣の高師直の一派を除こうとするのだとあって、官軍には攻撃を加えようとせずに、先づ探題の一色氏を攻め落とそうとしたので、少貳頼尚を始め、ふだんから一色氏を快く思っていなかった者達は続々とこれに応じて集まった。忽ち直冬の勢いは盛んになった。

一色範氏は大いに驚き、兵を遣わしてこれを討ったが、却ってさんざんに破られ、遂に全く身方がなくなって、肥前に遁れたので、直冬の勢いは更に大いに盛んになった。こうして忽ち九州を風靡すると、山陰、山陽の豪族までが続々と直冬の身方に付いた。

幕府はこれを聞いて、正平5年6月、高師泰に命じて先づ石見の豪族らを討たせたが、容易にこれを破ることが出来ないうちに、東国の方にも遥かに足利直冬に応じて兵を挙げる者が出来て来た。足利の内訌（訳注：内輪争い）は、こうして全国に広がろうとしたのです。

### たかうじ ただふゆせいばつ 尊氏の直冬征伐

足利尊氏はこれを見て、今は躊躇しているところではないと思ったので、正平5年10月、自ら九州に直冬を征伐しようと思い立って、京都は子の義詮に守らせ、自分は師直らを率いてその28日に京都を出発した。

その2日前の26日の夜に、坊さんになっている弟の直義が、窃かに京都を抜け出して、行方不明となったが、尊氏はそんな事には頓着せずに出発して、翌月の18日に備前(岡山県東部)の三石に着いた。尊氏はここで、四国、中国に令を下して、頻りに兵を集めたが、折から海上は波が高く船が通わず、山陰は雪が深く馬が進まなかったため、九州には年が明けてから行くことにして、暫く備前の福岡に滞陣した。

### ただよし なんちょう くだ 直義、南朝に降る

一方、足利直義は、師直が尊氏に従って出発するに先立って、窃かに彼を殺そうと図ったのを知って、京都を逃げ出したのですが、河内に奔って畠山国清の石川城に入ると、書面を近畿の諸将に送って、師直、師泰追討の兵を募った。日頃、師直兄弟の傲慢無礼なのを憎んでいた人々は皆これに応じて、忽ち直義の軍はその勢いが大いに振るったが、それだけでは未だ尊氏や師直らの軍に当ることはむづかしいと思ったのか、11月の下旬に、直義は吉野の朝廷に降って、官軍の援けを請おうとした、朝廷ではさすがに躊躇し、許すか否かの意見がまちまちでしたが、遂に北畠親房らの意見で、その降参をお許しになった。勿論、直義の降参が本心でないことは分かっていたが、朝廷に於いても深く考えられるところがあったのです。

## 第20話 足利氏の内訌

この時、直義は河内にいたが、遥かに使いを備前の尊氏の許に送って、自分が兵を挙げたのは、ただ、師直、師泰の兄弟に 憤るのみで、他には仔細がないので、早く、師直兄弟を誅してその首を渡してくれるようにと言った。、師直は怒ってこの使者を捕らえ、縛って京都に送った。

### 直義、京都に迫る

ここに於いて、直義は官軍の援けをも得て、堂々と京都に向った。12月の半ばごろには、淀、八幡の附近は直義の軍でいっぱいという有様でしたので、義詮は急使を備前に出して父の帰京を促すと共に、兵を発して極力これを防がせた。しかし、直義に応ずる者が非常に多く、殊に、翌正平6年正月の初めになると、越中の桃井直常の軍が北方から雪を冒して出て来て、南方の直義の軍と相応じて京都に迫ったので、義詮は遂にいたたまれなくなり、その15日に京都を落ちて、尊氏の軍に合しようとして西走した。

これより先、尊氏は備前で義詮の知らせを受けると、直冬征伐の事は止めて、急いで京都に引き返して来た。ちょうどこの15日に京都の近くに到着して、義詮を救おうとしていた時だったので、途中で義詮と出会うと、そこからは彼をも伴い、師直と共に京都に入り、折から市中に乱入していた桃井直常の軍と戦ってこれを破った。

### 尊氏の敗走

ところが、その翌16日の朝になってみると、山名時氏を始めとして、主なる諸将の多くが直義に付き、尊氏から去ったので、その兵が頗る少なくなつて、迎も支えられなくなったので、尊氏は義詮と共に僅かな残兵を率いて丹波に遁れ、更に転じて播磨に走り、書写山に本陣を置いた。多分、西国の兵を募つて改めて進撃するつもりだったのでしょう。

曩に石見で直冬党の豪族を攻めあぐんでいた高師泰は、尊氏らからの急報に接して、俄かに軍を旋して来たが、2月朔日に書写山に着いて尊氏の軍と合つた。それで、また大軍となったから、尊氏は、師直、師泰らと共に、その時、播磨の龍野の光明寺に陣取っていた石塔頼房を攻めた。ところが却つて破れて、遂に兵庫まで退いたが、2月17日の摂津の打出浜の戦いにまた敗れて、この日、師直は股を射られ、師泰は内兜を射られて負傷した。

### 高師直兄弟の最後

こういう風で、迎も勝つ見込みがなかったので、尊氏は八幡の直義の陣に使いを遣って、和睦を請うた。直義は直ちにそれを承諾したが、高師直、高師泰を坊さんにして引き渡す事が条件だったので、2月25日、尊氏は、禅僧の衣を着けた師直や念仏者の衣を纏った師泰らを連れて湊川を出発した。

ところが、翌26日、摂津の武庫川の附近まで来た時に、上杉重能の子の顕能が待ち伏せして、急に起こつて師直、師泰を殺した。父の仇を報いたのでした。久しく尊氏の執事として、足利幕府を自分の物のようにして執行っていた高師直兄弟も、その権力に任せて、あまりに横暴を極めたために、遂にこうして無慙な最後を遂げたのです。

## 第20話 足利氏の内訌

尊<sup>たかうじ</sup>氏は26日の夜、京都に入ったが、その姿は誠に悄<sup>しょうぜん</sup>然<sup>るにん</sup>としていて、まるで流人のようだったという。  
勝<sup>ただよし</sup>ち誇<sup>やはた</sup>った直<sup>ただよし</sup>義<sup>やはた</sup>は、その翌日、八幡から京都に帰った。

### 尊<sup>たかうじ</sup>氏<sup>わぼく</sup>兄弟<sup>わぼく</sup>の和<sup>ただよし</sup>睦<sup>よしあきら</sup>

こうして足利兄弟はともかくも和<sup>あしかが</sup>睦<sup>わぼく</sup>して、直<sup>ただよし</sup>義<sup>よしあきら</sup>を輔<sup>すけ</sup>けて再び政治上のことに与<sup>あづか</sup>ることになり、九州の足利直冬<sup>ただよし</sup>は九州探題<sup>きゅうしゅうたんだい</sup>に任ぜられた。けれども、一旦<sup>いったん</sup>仲違<sup>なかつが</sup>いをした兄弟の間は、再び以前のようにはならなかった上に、2人に属する諸将士もまた互いに疑<sup>たが</sup>いの目を以<sup>うたが</sup>って睨<sup>もって</sup>み合<sup>にら</sup>っていたので、京都の市中は、何となく不安<sup>ふあん</sup>の氣<sup>き</sup>に満<sup>み</sup>たされていました。

### 両<sup>りょう</sup>朝<sup>ちよう</sup>和<sup>わ</sup>睦<sup>ぼく</sup>の議<sup>ぎ</sup>

一方、吉野の朝廷では、曩<sup>さき</sup>に直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>が降参<sup>たす</sup>して官軍の援<sup>たかうじ</sup>けまでを得ながら、兄の尊<sup>たかうじ</sup>氏<sup>たかうじ</sup>との和<sup>たかうじ</sup>睦<sup>たかうじ</sup>が成ると忽<sup>たちま</sup>ちまた平氣<sup>へいき</sup>で幕府の政治に与<sup>あづ</sup>かっているのを深く怒<sup>いか</sup>られて、その誠意<sup>せい</sup>がないのを責<sup>ただよし</sup>められた。直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>はこれに対して、吉野、京都の両朝<sup>ぎ</sup>の和<sup>ごむらかみ</sup>睦<sup>かえ</sup>の議<sup>くだ</sup>を立てて、後<sup>ほんらい</sup>村<sup>り</sup>上天<sup>り</sup>皇<sup>せいけん</sup>に京<sup>かい</sup>都<sup>ふく</sup>にお還<sup>かえ</sup>り下<sup>くだ</sup>さるようにと申し上<sup>と</sup>げた。けれども、吉野の朝廷の本来<sup>ほんらい</sup>の理想<sup>り</sup>が政<sup>せい</sup>権<sup>けん</sup>のご快復<sup>かいふく</sup>にあるのですから、足利氏の幕府が政治を執<sup>と</sup>っていたのでは、これをお許<sup>ゆる</sup>しになる筈<sup>はず</sup>がない。それやこれやのために、この和<sup>やぶ</sup>睦<sup>やぶ</sup>の議<sup>やぶ</sup>は破<sup>やぶ</sup>れました。

この時、幕府の方にも、両朝<sup>つ</sup>和<sup>たかうじ</sup>睦<sup>はんたい</sup>の議<sup>つ</sup>に就<sup>つ</sup>いては、尊<sup>たかうじ</sup>氏<sup>たかうじ</sup>を始めとして反対<sup>はんたい</sup>した者が多<sup>たかうじ</sup>かったのです。然<sup>しか</sup>るに、直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>はそれを押し切<sup>お</sup>って南朝<sup>お</sup>に申し上<sup>お</sup>げて、しかも不成立<sup>ふせいりつ</sup>に終<sup>お</sup>わったのですから、その1派<sup>お</sup>からも非難<sup>ひなん</sup>された。こうして兄弟の間の感<sup>かんじよう</sup>情<sup>い</sup>の行<sup>ちが</sup>き違<sup>しだい</sup>いが次第<sup>はげ</sup>に激<sup>はげ</sup>しくなると共に、諸将士も2派に分<sup>は</sup>かれ、続々とその領国<sup>りようごく</sup>に帰<sup>ひそ</sup>って、密<sup>へい</sup>かに兵<sup>あ</sup>を挙<sup>あ</sup>げる準<sup>じゆん</sup>備<sup>び</sup>にかかった。また、南朝に降<sup>くだ</sup>った者もいた。播磨<sup>あかまつりつし</sup>の赤松<sup>そくぞく</sup>律師<sup>りようごく</sup>則<sup>ひそ</sup>祐<sup>へい</sup>の如<sup>あ</sup>きもその1人<sup>お</sup>で、彼は昔<sup>えん</sup>の縁<sup>こ</sup>故<sup>たど</sup>を辿<sup>だ</sup>り、大<sup>だい</sup>塔<sup>とう</sup>宮<sup>のみ</sup>護<sup>もり</sup>良<sup>なが</sup>親<sup>しん</sup>王<sup>のう</sup>の御<sup>お</sup>子の興<sup>おきな</sup>良<sup>なが</sup>親<sup>しん</sup>王<sup>のう</sup>を奉<sup>お</sup>じて兵<sup>あ</sup>を挙<sup>あ</sup>げ、遥<sup>あ</sup>かに吉野<sup>はる</sup>の官軍<sup>おう</sup>に應<sup>お</sup>じた。

### 直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>の京<sup>だ</sup>都<sup>しゆつ</sup>脱<sup>だ</sup>出<sup>しゆつ</sup>

この時、近江にも幕府に叛<sup>そむ</sup>いた者がいたので、尊<sup>たかうじ</sup>氏<sup>たかうじ</sup>はこれを平定<sup>へいてい</sup>するために、先<sup>たかうじ</sup>づ兵<sup>へいてい</sup>を率<sup>へいてい</sup>いて京<sup>たかうじ</sup>都<sup>へいてい</sup>を出<sup>へいてい</sup>発<sup>へいてい</sup>し、その翌日、義<sup>よしあきら</sup>詮<sup>よしあきら</sup>は播磨<sup>じつ</sup>の赤松<sup>たかうじ</sup>氏<sup>よしあきら</sup>を討<sup>よしあきら</sup>つために出<sup>よしあきら</sup>発<sup>よしあきら</sup>した。しかしこれは、その実<sup>じつ</sup>、尊<sup>たかうじ</sup>氏<sup>たかうじ</sup>、義<sup>よしあきら</sup>詮<sup>よしあきら</sup>の父<sup>よしあきら</sup>子<sup>よしあきら</sup>が途<sup>よしあきら</sup>中<sup>よしあきら</sup>から兵<sup>よしあきら</sup>を旋<sup>よしあきら</sup>して、直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>を挟<sup>ただよし</sup>撃<sup>ただよし</sup>する計<sup>ただよし</sup>画<sup>ただよし</sup>であると直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>に告<sup>ただよし</sup>げた者がいたので、直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>はこれを信<sup>おそ</sup>じて大<sup>おそ</sup>いに恐<sup>にわ</sup>れ、俄<sup>お</sup>かに京<sup>お</sup>都<sup>お</sup>を脱<sup>お</sup>出<sup>お</sup>して越<sup>お</sup>前<sup>お</sup>に遁<sup>お</sup>れた。桃<sup>もも</sup>井<sup>い</sup>、上<sup>うえ</sup>杉<sup>すぎ</sup>、畠<sup>はたけ</sup>山<sup>やま</sup>、山<sup>やま</sup>名<sup>な</sup>、吉<sup>き</sup>良<sup>ら</sup>などの諸<sup>お</sup>族<sup>お</sup>も直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>に従<sup>お</sup>ったので、京<sup>お</sup>都<sup>お</sup>は殆<sup>お</sup>どがら空<sup>お</sup>きになった。

吉野の朝廷では、その虚<sup>きよ</sup>に乘<sup>じよう</sup>じて日頃<sup>だ</sup>の大<sup>だ</sup>目的<sup>た</sup>を達<sup>た</sup>せようと思<sup>た</sup>われ、新<sup>くだ</sup>たに降<sup>と</sup>った佐<sup>と</sup>々<sup>と</sup>木<sup>と</sup>氏<sup>と</sup>、土<sup>と</sup>岐<sup>と</sup>氏<sup>と</sup>らの武<sup>めい</sup>士<sup>たかうじ</sup>に命<sup>えい</sup>じて、尊<sup>えい</sup>氏<sup>ざん</sup>を討<sup>そう</sup>たせると共に、叡<sup>み</sup>山<sup>こと</sup>の僧<sup>り</sup>徒<sup>くだ</sup>に勅<sup>かい</sup>を下<sup>ふく</sup>して京<sup>お</sup>都<sup>お</sup>の回<sup>お</sup>復<sup>お</sup>を囑<sup>お</sup>らせた。

これを聞いて、義<sup>よしあきら</sup>詮<sup>たかうじ</sup>も、尊<sup>たかうじ</sup>氏<sup>たかうじ</sup>も途<sup>かえ</sup>中<sup>かえ</sup>から軍<sup>かえ</sup>を旋<sup>かえ</sup>して来<sup>かえ</sup>たが、一方<sup>たかうじ</sup>に官<sup>てき</sup>軍<sup>たかうじ</sup>を敵<sup>たかうじ</sup>としながら直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>を討<sup>う</sup>つことは中々<sup>なかな</sup>困<sup>こん</sup>難<sup>なん</sup>であるので、先<sup>ま</sup>づ吉野<sup>ししや</sup>の朝廷<sup>た</sup>に使<sup>こう</sup>者<sup>さん</sup>を立てて、降<sup>むね</sup>参<sup>むね</sup>の旨<sup>むね</sup>を申し上<sup>むね</sup>げた。けれども、既に直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>の例<sup>たかうじ</sup>もあつて、尊<sup>せい</sup>氏<sup>い</sup>の降<sup>わ</sup>参<sup>わ</sup>にも誠<sup>わ</sup>意<sup>わ</sup>のない事<sup>わ</sup>が分<sup>わ</sup>かっていたので、朝廷ではお許<sup>お</sup>しにらなず使<sup>お</sup>者<sup>お</sup>を追<sup>お</sup>い返<sup>お</sup>した。尊<sup>たかうじ</sup>氏は直<sup>ただよし</sup>義<sup>ただよし</sup>の許<sup>もと</sup>へも使<sup>わ</sup>者<sup>わ</sup>を送<sup>わ</sup>って和<sup>わ</sup>睦<sup>わ</sup>を囑<sup>わ</sup>ったが、これも成<sup>わ</sup>立<sup>わ</sup>しなかつた。

## 第20話 足利氏の内訌

### ただよし はし 直義、関東に奔る

ただよし もも いただつね はたけやまくにきよ ほそかわあきうじ あさいごおり はっそうざん  
のみならず、直義党の桃井直常、畠山国清、細川顕氏らは越前から近江に出て、浅井郡の八相山  
た こ たかうじ たかうじ もも いただつね はし  
に立て籠もって尊氏に反抗したので、遂に尊氏は兵を率いてこれを攻めて、桃井直常らを走らせた後に、  
ただよし ただつね やぶ はたけやま  
直義と会って和睦したが、後で聞いた直常がこの和睦に反対したので、忽ちまた破れた。この時、畠山  
くにかよ ほそかわあきうじ わぎ やぶ ふへい そむ たかうじ ただよし にわ  
国清と細川顕氏は和議が破れた事に不平をおこして、叛いて尊氏に付いた。そのために直義の兵は俄か  
へ けいせい あや むし とお さ こんきよ たかうじ たいこう  
に減って、形勢が危うく見えたので、彼は寧ろ遠く関東に去って、鎌倉を根拠として尊氏に対抗しよう  
という策を立てた。

### たかうじ なんちょう くだ 尊氏、南朝に降る

これが若し事実となつては、たかうじ  
これが若し事実となつては、尊氏に取っては容易ならない事で、彼は一時も早く関東におもむき、ただよし  
う  
討たなければならぬと考えた。しかし、よしあきら まか お  
京都を義詮1人に任せて置いては、いつ官軍に追い落とさ  
れるかも分からないので、それも出来ない。それで、たかうじ くだ うしろ しんばい  
尊氏は、いかにしても南朝に降り、後の心配を  
なくして置いて関東にくだ  
くだ さき ねが ゆる お かえ こうさん  
先1度お願いして許されなかったのを押し返してまた降参を願  
い、天皇が京都にかんこう しんせい こ  
御還幸になって、親政をなさるようにと請うた。しかし、朝廷では、今度もようい  
お許しにならなかつたが、たかうじ す  
尊氏はどこまでもこの考えを捨てず、後には播磨のあかまつそくゆう もと や  
赤松則祐の許へ人を遣って、  
そくゆう しき こんがん  
則祐からも頻りに懇願させたので、遂に吉野の朝廷でも、10月24日になって、たかうじ よしあきら こうふく ゆる  
尊氏、義詮の降伏をお許  
しになり、同時にただよしといふ みことりのり くだ  
直義追討の勅をも下された。

ここに於いて、お たかうじ ただよし みことりのり ほう おもむき せん  
尊氏は、直義追討の勅を奉じて関東に赴くことを諸国に宣し、11月4日、兵を  
ひき はつ  
率いて京都を発した。

### よしあきら ほくちよう はい 義詮、北朝を廃す

こ よしあきら こうふく じじつ あき あしかが そうこういん  
越えて7日、義詮は降伏の事実を明らかにするために、足利氏がお立てした北朝の崇光院および皇  
ただひとしんのう はい か かんおう しょうへい もち つ  
太子直仁親王を廃して、且つ北朝の観応という年号をも廃して、正平6年を用いる事にした、次いで、  
ほう さんしゅ じんぎ あ の う あんぐう うつ じんぎ ぎき  
12月23日には北朝で奉じた三種の神器をも賀名生の行宮(仮の皇居)に遷された。この神器が偽器で  
あることは前に述べた通りです。

### ごむらかみ てんかとういつ 後村上天皇の天下統一

こうしてごむらかみ  
こうして後村上天皇は全く天下を一統されることになったが、京都へのかんこう そうとう じゅんび い  
還幸には相当の準備も要るの  
で、それまでの間は、しばら あ の う あんぐう と えんげん  
なお暫く賀名生の行宮で政治を執る事にされた。延元元年に朝廷が2つに分か  
れてから15年を経て始めてごういつ ごだいご りそう じつげん  
合一し、後醍醐天皇の理想が実現されたのですが、しかしこの合一は、も  
ともとたかうじ べんぎじょう こうふく もと お つ おも  
尊氏の便宜上から出た降伏がその本になっていたのですから、このままで落ち着くものとは思わ  
れません。すなわ たかうじ ただよし う と しゅだん  
即ち、尊氏は、直義を討ち取るまでの手段にしたのでして、朝廷でもこの事はよく知って  
おられたが、こちらにはまたこちらの はかりごと たかうじ おもむき  
謀があつて、尊氏を関東に赴かせた後で、京都を攻めてよしあきら  
ほろ につ たかうじ う  
滅ぼすと共に、東国の新田氏その他に命じて尊氏を討たせようとなされたのです。

## 第20話 足利氏の内訌

### たかうじ ただよし どくさつ 尊氏、直義を毒殺す

さて尊氏は途々で兵を集めて、正平6年12月に駿河の手越宿（静岡市手越）に着くと、使いを野州（下野の別名、栃木県）の宇都宮氏、白河（福島県）の結城氏らに遣わして、直義を挟撃する策を取った。この時、直義は伊豆の国府にいましたが、尊氏が自分で攻めて来たと聞くと、これを駿河の薩埵山に迎えて戦いを始めた。互いに勝敗が決めなかったうちに、宇都宮氏を始め関東の諸豪族が、敵尊氏の身方となって後ろから足柄山に迫って来たので、直義は遂に支えきれずに伊豆の北條に遁れた。尊氏は進んで伊豆の国府に入り、やがて直義に和睦を申し入れてこれを迎え、共に正平7年正月5日に鎌倉に着いた。

その後尊氏は、直義を延福寺という寺に押し込めておいて、2月26日に遂にこれを毒殺した。時に足利直義は45才でした。彼は、もとより憎むべき朝敵ではあったが、兄の尊氏のためには頗る苦労があったのに、その実の兄の手に罹って殺されるというのは、よくよく天罰が重かったのです。また、その殺された日が、去年、高師直、高師泰らが上杉顕能に殺された日と同じ2月26日だった事も、何かの因縁事であろうと、当時の人々は噂し合ったということです。

（第20話 足利氏の内訌 終わり。次は前頁に戻り、第21話 官軍の京都回復運動 へ）